

SF作品が夢見た 人間拡張

大森 望

(翻訳家・書評家)

人間拡張の概念を単なる小道具にとどまらず、
作品の世界観を形作る要素として扱ってきたSF作品。

その当時は、荒唐無稽にも思えた拡張技術の数々は、

いまや現実のものとなりつつある。

なかには、SFに着想を得て開発されている

テクノロジーもあることだろう。

SF作品が描いてきた人間拡張の概念について、

翻訳家で書評家の大森望が語る。



『三体II 黑暗森林』(上下巻)
劉慈欣著／大森望、立原透耶、上原かおり、泊功 訳／早川書房刊／2020年

肉体改造、サイボーグ化、遺伝子改変、超能力の獲得、意識のアップロード、機械との融合、種としての進化……。古来、フィクションの世界では、人間拡張のさまざまな方法が考案されてきた。その歴史は古く、不老長寿や若返り願望まで含めれば、『人間拡張』という発想は、古代メソポタミアの『ギルガメッシュ叙事詩』まで

——つまり、人類文明の始まりまで——遡る。未来を描くSFのなかで、いまや人間拡張は、

ありふれた背景のひとつ。百年先、千年先を描くのに、そこに登場する人間が現在とまったく変わっていないとしたら、むしろそのほうがリアリティがないと言われるかもしれない。

精神を拡張する

たとえば、全世界で二九〇〇万部のベストセラーになった劉慈欣の『三体』三部作の第二部

この小説に描かれる未来社会(西暦二五四〇年)では、子どもは母親からではなく、人工授精によって瓶から生まれるので、親子関係は存在しない。結婚制度もないから夫婦関係もなく、当然、家族という概念もない。テクノロジーの進歩で病氣も老化も追放され、すべての人間はセックスとスポーツを楽しみながら健康で幸せな毎日を送り、満六〇歳で安楽に死ぬ。社会の安定を維持するため、個々の人間は出生(出瓶)前から社会階層が決められ、さまざまな条件づけと睡眠学習によって自分の属する階層に最適化され、それによって(個々人の主観では)万人の幸福が実現している。生まれながらにして「私はハッピーです」という精神印章がほどこされているわけだ。少子化も高齢化も、戦争も暴力も、不況も金融危機も、自殺も食糧問題も教育問題もない、すばらしい新世界……。

あなたの健康を見守ります

この理想的な世界をさらにソフト化したのが、伊藤計劃『ハーモニー』(二〇〇八)で描かれる高度医療社会。そこにはWatchMeと呼ばれる医療用ナノマシンが万人の体内でつねに体の状態を見守り、理想的な体型や心身の健康を維持し

てくれる。この「真綿で首を絞めるような、優しさに息詰まる世界」に叛旗を翻した少女たちの物語から『ハーモニー』は幕を開けるのだが、二〇二一年のいま、この高度な健康監視社会は、スマホと連動する腕時計型ガジェットによってある程度まで現実化している。実際、健やかな毎日のための究極のデバイスを標榜するApple Watchのサイトに行けば、「いつもあなたを見守っています」と大きな親しみやすい字で書いてあって、まるで頼りになる優しいビッグ・ブラザーのようではないか。

健康監視の流れは、新型コロナウイルスの流行によって、世界的にますます加速している。『三体』の劉慈欣も参加したフジテレビのトーク番組『世界SF作家会議』では、各国の名だたるSF作家たちが人類の未来について意見を交換したが、中国の若手SF作家・陳楸帆は、『ハーモニー』に触れつつ、人体埋め込み式のチップを通じて個人の健康状態をチェックすることがもうすぐあたりまえになるかもしれないと語り、次のように述べている。

しかしその中で人の自由、倫理のボーダーはどこにあるのか。政治のコントロールは市民の行動をどこまで支配するのか、について考えていく必要があります。データのプライバシーは

『黑暗森林』(二〇〇八)では、地球よりも圧倒的にすぐれた文明を有する異星人(三体文明)の侵略に対抗する手段のひとつとして、人間の脳に揺るぎない信念を刻印する「精神印章」という技術が開発される。ふつうに考えれば、人類が三体文明に勝利する可能性はゼロに等しいので、誰もが敗北主義に陥ってしまう。それを防ぐために、勝利の信念を宇宙軍の兵士に植えつけようというのである。精神に刻印される信念とは、「三体世界の侵略に抵抗する戦争に、人類はかならず勝つ。太陽系に侵入した敵は、かならず抹殺する。地球文明は、この宇宙に永遠に存続する」。

従来のSFなら、人類の知力を増強しようと考えるところだが、あえて「信念」に着目した点がおもしろい。作中では、こうした試みは内心の自由を奪う思想統制ではないかと世界各国の激烈な反発を招くし、そもそもこのプロジェクトの裏には秘められた別の目的があることが判明するのだが、「精神印章」というアイデアに倒錯した魅力があることは否定できない。

人間の精神を操作するというモチーフは、一九三二年に出版されたディストピアSFの古典、オルダス・ハクスリーの『すばらしい新世界』にすでに登場している。

徹底して保護されるべきで、それは今後の重要な問題になると思います。(早川書房『世界SF作家会議』より)

『三体』の英訳者であり、SF作家としても世界の最前線に立つケン・リュウは、人類滅亡をテーマにした『世界SF作家会議』第二回で、人間拡張によって変化した人類は、自分たちのことをもはや人類ではなく「ポストヒューマン」(後述)だと考えるのではないかと、だとすれば「人類」は滅亡するのかもしれないと述べ、モラルの問題に言及している。いわく、

わたしにとつてもっとも興味深い問いは、ポストヒューマンがいまの人類と比べて、モラルという点で優れているかということ。知能的にも身体的にもより優れた人間をつくることは容易ですが、モラル的に優れた人間を作ることは遥かに困難です。ですので、もしポストヒューマンが現代人より優れたモラルを獲得できたとしたら、ある意味、人類の滅亡は嘆くべきことではなく、祝うべきことかもしれません。

このようなモラルの変化は、前述した劉慈欣『黑暗森林』でも描かれる。二〇〇〇隻から成る地球艦隊が三体文明の探査機一機になすすべもなく蹂躪されたのち、数少ない生き残りの宇宙